

第154号

平成14年7月

E-mail : © 2002
 shimz@mb.infoweb.ne.jp
 LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集発行人

清水吉男

(株)システムクリエイツ

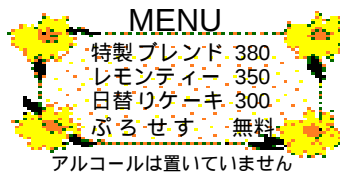
横浜市緑区中山町 869-9

電話 045-933-0379

FAX 045-931-9202



19回め



7月15日に政府調達ソフトについての入札要項 (<http://www.meti.go.jp/>) が改正され、そこに応札者の技術的評価に関する箇所、「CMMI」が書けるように変更した。1年前の経験から、今度は応札時に「CMMも書けますよ」と言って「需要」の掘り起こしを先にやっておいて、市場の方から「日本版CMM」を待望する状態を作ってしまうと言うのだろうか。何れにしろ、これで「CMMの認証取得競争」が起きるだろう。この結果、どのような事態が引き起こされるか、誰が考えているのだろうか。この店の来てくれるエンジニア達は、これで引っかけ回されるかもしれない。会社のトップが良識ある人であることを祈ろう。



「マスター。こんにちば」
 「おや、今日は早いね。もう帰るのかね」
 「今日は、マスターに相談があって早めに出てきちゃいました」
 といってカウンターのいつもの場所に座った。
 「あ、いつものブレンドをお願いします」と言いながら鞆から何枚かの紙を取りだし、カウンターの上に広げだした。
 その様子を見ながら、ゆっくりとドリップに取りかかった。あたり一面にコーヒーの香りが広がる。何とも言えない瞬間だ。

「ところで、何の相談かな」
 「はい、プロセスの定義のことで、良く分からなくなっていました。レベル2の『プロジェクト計画』のところでは、ライフサイクルモデルを決めるように書かれていますが、これってプロセスの定義のことでしょうか？」
 「「ライフサイクルモデル」って何のことかわかる？」
 「はい、ウォーターフォールとかスパイラルとか、えっと、そうそうインクリメンタルとかいうのでしょうか？」
 「それを最初に選択しようというわけだね」
 「はい、でもそれを決めてどうなるのでしょうか？」
 (おや、この人は入り口のところで引っ掛かっているんだ。もっと理解しているのかと思ったが、意外だったな)と呟きながら、ドリッパーにお湯を注いだ。

「もしかすると、このライフサイクルモデルを選択するということと、プロセスの定義とが繋がらないのかな？」
 「はい、そうです。たとえば今回のプロジェクトは既存のシステムに新機能を追加するものですが、これって、どのモデルになるのでしょうか。ウォーターフォールかなとも思うのですが、これって新規開発の時に使うモデルですよ」
 「たしかに文献などでは、ウォーターフォールモデルは新規開発の場面で説明されているね。でも、新規開発に限ったものではないよ。プロ

セスと成果物が流れるように連鎖しながら最終成果物を作り出す形であれば、ウォーターフォールモデルということになる。以前、『派生モデル開発プロセス』のことを話したと思うけど、あれも、分類上はウォーターフォールモデルの変形だね」
 出来立てのコーヒーを彼の前に差し出しながら、彼の顔をのぞき込んだ。

「分かりました。ということは今回のプロジェクトはウォーターフォールモデルということではないんですね」

「これだけの情報で同意を求められても困るね。派生開発だって、インクリメンタル・モデルを使うことだってできるよ。1回のイテレーションで仕上げるのであれば、通常はウォーターフォールということになるだろうな」
 「これはプロセスの定義とは違うんですね」
 「そうだね。ライフサイクルモデルを選択しただけでは、プロセスの定義にはならないね」
 「ウォーターフォールというのは、要求定義とかシステム設計とか詳細設計とやってコーディングに入るのでしょうか。それを選択することを決めれば、それでプロセスは決まると思うんですが」

「文献に書いてあるウォーターフォールは、新規開発の一つのひな形にすぎないもので、プロセスを大きく捉えると、だいたいそのようなプロセスになるけど、実際の場面では、そんな大雑把なプロセスでは役に立たないね。実際に、派生モデルだといったね。そこでの要求定義プロセスはどんな成果物を作り出すつもりかね」
 「どんな成果物って、要求定義プロセスは要求仕様書を作るんでしょう」
 「その要求仕様書にはどのようなことが書かれるのかな。新機能の仕様の他に何かイメージしているのかな」
 「新機能の仕様以外に何か書くことがあるのでしょうか？」

「さっきも言ったけど、本に書いてあるウォーターフォールモデルは、殆ど例外なく新規開発の場面を想定したもので、派生開発の時とは違って来るよ。たとえば、今回の派生開発では『システムを設計する』なんてプロセスは出てこないでしょう。あるとすれば『既存システムとの整合性を検討する』プロセスだろう。実際に行う行動は全く違って来る。コーディングだって、新機能の分はそれなりの設計書のようなものに沿って書けると思うけど、実際には、それ以外にソースを修正する作業が入ってくるでしょう。それは新規開発の時には存在しないプロセスだよ」

「ということは、ライフサイクルモデルを決めるというのは、プロセスの種類というか、大きな枠を決めるだけなんですね」
 「そういことだね」

「実際には、その枠の中で具体的にどのようなプロセスを繋いでいくかを決めるということですか」
 (この男、意外とひらめきのスキルはあるんだ)

「中間成果物をうまく生み出しながら、無駄のないプロセスを繋ぐわけだね」

「そこに出てくるプロセスで何をするのかを書いたのがプロセスの定義書ということですね」
 「そういうことだね。ただし、成果物の定義が曖昧だと、プロセスの定義も抽象的な表現になってしまうから注意が必要だよ」
 「その成果物の各項目が作り出せるアルゴリズムみたいなものが定義になるということですね」

「どうやら、ここまでは何とかたどり着いたようだね。一時はどうなることかと思ったが」といって、彼に目配せをしてみせた。

「えっ、それってどういうことですか」と、コーヒーを啜りながら、げげんそうな顔をしている。

「これで、プロセスを定義するというのが分かったつもりかい？」
 と意地悪く突き放してみたが、応答が無い。

「プロセスを定義する前に「設計」したのかね。プロセスの定義はソフトウェアシステムで言えば関数の定義と同じだから、設計プロセスの出力として出てくるはずだよ。つまり、『プロセスの定義』は、開発システムを設計した結果としての成果物だよ。いつ開発システムを設計したの？ ライフサイクルモデルを選定するのは、大きなパターンを選んだだけだよ。今回のプロジェクトを成功させるための具体的なアイデアや考えをそのパターンに盛り込んで、本当に実行されるプロセスを設計することが必要だよ」

「開発システムで実際に実行されるプロセスを設計する、ということですか」
 といった考え込んでいる。



しばらくして顔を上げて、
 「さっき、ソフトウェアシステムと同じだと言われましたよね」
 「ああ、言ったよ」
 「ソフトウェアシステムは、今回の要求をどうやって実現しようかということで設計するんですよ」

「そう、同じように開発システムでも今回の要件が設計の入力になる」

「そうか。要求仕様書に機能や品質の他に、納期やマイルストーンやリソースの制限などの作業上の要件が記述されているのは、このためなんですね。要件のこの部分が開発システムの設計に使われるんだ」

「関係が掴めたようだね。要求仕様書の機能や品質のなかでも、実現が難しいような項目は、開発システムを設計するときの入力になるよ」
 「予備調査をやったり、実現を早めたりするために開発システムに反映するんですねプロセスを設計するというのはこのことなんだ」

プロセス定義は、プロセスを設計した結果として出てくるものであり、要求仕様はプロセスの設計の入力にもなる。

暁鐘の音

137

崩壊する"コミュニティ"

自殺者が三万人を越えている。背景に経済的理由が多いことは予想される所である。他に、二〇代の若い世代による凶悪犯罪も目に付く。何れにも「失業」という経済的な理由が絡んでいる。失業状態が、見境の無い行動への引き金になったり、社会に対する恨みとなって暴発している。四〇代五〇代の失業が自殺の引き金になっているのに対して、二〇代三〇代の失業は他人を巻き込んだる犯罪を呼んでいるようにも見え、そこに感じるのは、社会からの疎外感である。

元来、日本では「コミュニティ」の概念はなかった。あるのは、居住地域での交流であり、職場における社会である。戦後の日本も、この流れにそって企業「コミュニティ」が形成された。日本の企業は、財やサービスを提供することで社会に貢献するという本来の目的以外に、「コミュニティ」の役割も果たしてきた。

自業者が三万人を越えている。背景に経済的理由が多いことは予想される所である。他に、二〇代の若い世代による凶悪犯罪も目に付く。何れにも「失業」という経済的な理由が絡んでいる。失業状態が、見境の無い行動への引き金になったり、社会に対する恨みとなって暴発している。四〇代五〇代の失業が自殺の引き金になっているのに対して、二〇代三〇代の失業は他人を巻き込んだる犯罪を呼んでいるようにも見え、そこに感じるのは、社会からの疎外感である。

人殺者が三万人を越えている。背景に経済的理由が多いことは予想される所である。他に、二〇代の若い世代による凶悪犯罪も目に付く。何れにも「失業」という経済的な理由が絡んでいる。失業状態が、見境の無い行動への引き金になったり、社会に対する恨みとなって暴発している。四〇代五〇代の失業が自殺の引き金になっているのに対して、二〇代三〇代の失業は他人を巻き込んだる犯罪を呼んでいるようにも見え、そこに感じるのは、社会からの疎外感である。

人殺者が三万人を越えている。背景に経済的理由が多いことは予想される所である。他に、二〇代の若い世代による凶悪犯罪も目に付く。何れにも「失業」という経済的な理由が絡んでいる。失業状態が、見境の無い行動への引き金になったり、社会に対する恨みとなって暴発している。四〇代五〇代の失業が自殺の引き金になっているのに対して、二〇代三〇代の失業は他人を巻き込んだる犯罪を呼んでいるようにも見え、そこに感じるのは、社会からの疎外感である。

今月の一言

「間違った方向に走る船の上では、正しい方向へ歩いてもそれほど進めない」

(ミヒャエル・エンデ「エンデのメモ箱」より)

失ったとき自分を見失い、人生は生きるに値しないものとして映るだろう。その時、自分の存在を黙って消すか、「社会」に対する憤りの形で周囲の人を巻き込んで消すかの選択が行われることになる。

く。ドラッガーに言わせると、日本は問題の解決を常に先送りしてきた国だ。結果的に、落ち着くところに落ち着くという形で解決してきただろうが、「コミュニティ」の問題も先送りされると、犠牲者が増えることになる。

相次ぐ企業会計の不正でアメリカが揺れている。「IT」だとか「ブロードバンド」だとか言うて、少々競争を急いだ感もある。「ニューエコノミー」とはやし立てたことで悪乗りさせたのかもしれない。経済を優先するあまり、企業家倫理が希薄になったのかもしれない。実態経済を上回る「マネー」の存在が、予想を超える動きをしたのかもしれない。でも所詮は人がやることだから、こういう不正はどこかで出てくることは避けられない。問題は、この事態に如何に対応するかであり、そこから何を学ぶかである。

その点では、さすがに対応が素早い。政府機関が直接乗り出しての実態調査も素早く、違反容疑が確定した途端に、関係者を逮捕している。再発防止に向けての法律の整備も素早い。経済が第一優先の国だけに、経済問題への対応は機敏だ。そうでなければ、アメリカという国は今の立場を維持できない。

個別に改革の動きを見せても、全体として進む方向が定まらない中では、改革は遅々として進まない。